

沈  
一  
系  
系

後  
編

三

911.308

八

後編 3









一 諸礼 停止

芭蕉庵桃青判

一 諸礼停止

一 出合を近 但や先

一 一句一直 空月記一句

右三ヶ條 舊式也

芭蕉庵桃青書之

行脚掟

一 衣箱を二つにわけて 再宿するに 杖は石上平臥し  
 して 衣箱を 枕とす  
 一 宿すに 杖は 杖の 節を 物に 命を かけしめ

一 君父の難言は 承りて 心におもひ 承りて 何れも 天を 仰ぎて  
 思ひきり 情はれは

一 衣箱は 財を 置かず 一色一衣 一鉢一盃 足らざる 志し  
 程ゆへ

一 魚を 數の 肉を 好く 嗜む 一 肉の 甚食 恥味 する けり 人  
 知事 する けれ 世に 人の 業根を 咬く 百事を する 人の 強  
 き せしめ

一 人の 心は 大なる 心 己の 心を ちか ちか 守る 心を 守る 心を 守る  
 心を 守る 心を 守る 心を 守る 心を 守る 心を 守る

一 舟に 乗る 舟に 乗る 舟に 乗る 舟に 乗る 舟に 乗る  
 舟に 乗る 舟に 乗る 舟に 乗る 舟に 乗る 舟に 乗る

一 舟に 乗る 舟に 乗る 舟に 乗る 舟に 乗る 舟に 乗る  
 舟に 乗る 舟に 乗る 舟に 乗る 舟に 乗る 舟に 乗る







しつやがーかひ切と猫の意 凡人

福式自と信安より書本の方へ去歸して依持するの一事は  
りやわらへしきと外かたれ風情をくみし本性をり  
はるくしき是より先手職人の若回方よりく人のしき  
若むお前し取れも交り玉て初し本性をりしき  
言ひしき

本より一に二よりけむの次らつり 若手

本より一に二よりけむの次らつり 若手

書本と二よりけむの次らつり  
りやわらへしきと外かたれ風情をくみし本性をり  
はるくしき是より先手職人の若回方よりく人のしき  
若むお前し取れも交り玉て初し本性をりしき  
言ひしき

まへけりしきと外かたれ風情をくみし本性をり

まへけりしきと外かたれ風情をくみし本性をり 伊賀 萩子

若むお前し取れも交り玉て初し本性をりしき  
言ひしき

本より一に二よりけむの次らつり 若手

本より一に二よりけむの次らつり 若手

本より一に二よりけむの次らつり 若手

本より一に二よりけむの次らつり 若手

若むお前し取れも交り玉て初し本性をりしき  
言ひしき

少〜の少〜とて今ノ篇上章〜と入句中〜とて

おく楳 くのたれとてり 郭 野水

積りの楳の時古本と此句の河の也と楳を〜とて

末と河のの楳〜とて〜とて船とかく〜とて

はよ物所 着白の〜とて〜とて二条の物に

〜とて〜とて入〜とて楳若の〜とて

海とて

〜とて楳を前量と楳了ぬ 故人

翁古本と楳〜とて楳を〜とて

の歌と楳〜とて〜とて

蒲とて楳〜とて〜とて

後句とて〜とて女上かく〜とて

の 竹の必争く句奇異とて

おいて〜とて〜とて

一 楳前 やら中〜とて古本の 額 古本

古本とて〜とて〜とて

名おれ〜とて〜とて

ハは〜とて今ノ篇とて

〜とて楳前とて

〜とて

一 印の〜とて楳前とて

けの初〜とて〜とて

此句〜とて〜とて





いふはひくはさるやまはと月々余一と山をさかあし宿り  
岩のり又ひさしり種言を尺付とすとす沙回とてひさしり月  
のふまやわのれとたのりむとんてういくはくの風流をみぬ自  
稱のりともさる一とひさしり余と稱す一と及の小文と入るん  
言未とす、趣向ハ折ニと字とてうけりぬん沙の文を以てこれハ  
か、指巻の意とてさるや退る考すす自稱のりともさる一と及の小文  
おぼやかりしりてうめはひさしり余とすさる一と十倍さるすまはと  
そ心と知さるる一と及の小文ハ師の自撰の集りたるとかして  
さる一と及の草稿なうして造化すしりてうけりぬん草とてさる一と及の  
ゆるり集り入たりやとゆふ沙回余門人及の小文集り入るると  
おぼやかりしりてうめはひさしり余とすさる一と十倍さるすまはと

つづくはひさしり余とすさる一と十倍さるすまはと  
文章

看難はの病はさる人こく松伽の句をすめて今日とて系記作の句  
一字のち作を加さるるひさしりてうめはひさしり余とすさる一と十倍  
ひさしりてうめはひさしり余とすさる一と十倍さるすまはと  
初はひさしり余とすさる一と十倍さるすまはと  
わさひさしり余とすさる一と十倍さるすまはと

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十

いふはひくはさるやまはと月々余一と山をさかあし宿り  
岩のり又ひさしり種言を尺付とすとす沙回とてひさしり月  
のふまやわのれとたのりむとんてういくはくの風流をみぬ自  
稱のりともさる一とひさしり余と稱す一と及の小文と入るん  
言未とす、趣向ハ折ニと字とてうけりぬん沙の文を以てこれハ  
か、指巻の意とてさるや退る考すす自稱のりともさる一と及の小文  
おぼやかりしりてうめはひさしり余とすさる一と十倍さるすまはと  
そ心と知さるる一と及の小文ハ師の自撰の集りたるとかして  
さる一と及の草稿なうして造化すしりてうけりぬん草とてさる一と及の  
ゆるり集り入たりやとゆふ沙回余門人及の小文集り入るると  
おぼやかりしりてうめはひさしり余とすさる一と十倍さるすまはと



何れも世に... 試み... 能く... 可なり... 又是...  
何れも大... 試み... 能く... 可なり... 又是...

一 何れも世に... 試み... 能く... 可なり... 又是...  
何れも大... 試み... 能く... 可なり... 又是...

何れも世に... 試み... 能く... 可なり... 又是...  
何れも大... 試み... 能く... 可なり... 又是...

一 何れも世に... 試み... 能く... 可なり... 又是...  
何れも大... 試み... 能く... 可なり... 又是...

何れも世に... 試み... 能く... 可なり... 又是...  
何れも大... 試み... 能く... 可なり... 又是...

兄弟此魚尺合... 何れも大... 試み... 能く... 可なり... 又是...

何れも世に... 試み... 能く... 可なり... 又是...  
何れも大... 試み... 能く... 可なり... 又是...  
何れも世に... 試み... 能く... 可なり... 又是...  
何れも大... 試み... 能く... 可なり... 又是...







去るのひかりを本に其れを有るものひかりを定む  
と一白作らるるひかりのひかりを定むと一白作らるる  
と位を定むればひかりのひかりを定むと一白作らるる  
なるんひかりのひかりのひかりを定むと一白作らるる

一 なるんひかりのひかりのひかりを定むと一白作らるる

ひかりのひかりのひかりを定むと一白作らるる

ひかりのひかりのひかりを定むと一白作らるる

ひかりのひかりのひかりを定むと一白作らるる

一 赤人のひかりのひかりのひかりを定むと一白作らるる

ひかりのひかりのひかりを定むと一白作らるる

二 赤人のひかりのひかりのひかりを定むと一白作らるる

ひかりのひかりのひかりを定むと一白作らるる

ひかりのひかりのひかりを定むと一白作らるる

ひかりのひかりのひかりを定むと一白作らるる

ひかりのひかりのひかりを定むと一白作らるる

ひかりのひかりのひかりを定むと一白作らるる

ひかりのひかりのひかりを定むと一白作らるる

ひかりのひかりのひかりを定むと一白作らるる

ひかりのひかりのひかりを定むと一白作らるる

ひかりのひかりのひかりを定むと一白作らるる

ひかりのひかりのひかりを定むと一白作らるる

ひかりのひかりのひかりを定むと一白作らるる

ひかりのひかりのひかりを定むと一白作らるる

ひかりのひかりのひかりを定むと一白作らるる

筆先を以て筆多ふに能くし言ひ又は存いし風範  
うんじのてんひつてしをゆつひちちまう引くけみ  
つふ此集の吾知不傳の書あうきし此書なく強くするゆゑ  
ししく此書の句もして許しうひく句類の安んじしや  
物流るはこれ忘却せしむるなり

一卯七言散句の切字を今しとハハ何言本を何何の句曰切  
字を初知言本をいふて傳授所ハ自分元快し傳る相  
回りの言本をいふてハ散句ハ一本本のてんじも楮根を  
附のハ散句ハ大なりしとて今もハ楮根の句ハ切字の  
てんじもいふて散句の終し句回無し言れしとてハ傳る知る  
なり是も傳授すし切字のハ楮根をてんじも楮根を  
てんじもいふて散句の終し句回無し言れしとてハ傳る知る  
なり

一ハ是のてんじハ散句ハまじりて言はれし切字を  
今ハ切字をまじりて切字の句ハ言を以ててんじもいふて  
きれるまじりてしとてんじもいふて切字の数を定む  
以て定字を今ハ切字ハ七ハ八のつて切字の終し句ハ入て切  
字の句又入しとてきれるとてんじもいふて切字のやけハ  
己言のてんじもいふて切字ハ三段切これハ切字も右同く  
傳授のてんじもいふて又草字句ハ沙曰吾ハ三十一字とてきれる  
ハ十七字とてきれる又草字句ハ又或人之沙曰切字も右同く  
四十八字とて切字し用ひする時ハ二字も切字なりし是ハ  
これ切字とてんじもいふて切字もいふて

一卯七言散句の切字を楮根をいふてハ何言本を何何の句曰切  
字を初知言本をいふて傳授所ハ自分元快し傳る相  
回りの言本をいふてハ散句ハ一本本のてんじも楮根を  
附のハ散句ハ大なりしとて今もハ楮根の句ハ切字の  
てんじもいふて散句の終し句回無し言れしとてハ傳る知る  
なり是も傳授すし切字のハ楮根をてんじも楮根を  
てんじもいふて散句の終し句回無し言れしとてハ傳る知る  
なり















定家之隣を住しし人黄之新恒をよぶれり

一西宮の西宮の集りてはしるる人なりしは

のたのむるはまはしるる人なりしは

一西宮の西宮の集りてはしるる人なりしは

のたのむるはまはしるる人なりしは

一西宮の西宮の集りてはしるる人なりしは

のたのむるはまはしるる人なりしは

一西宮の西宮の集りてはしるる人なりしは

のたのむるはまはしるる人なりしは

一西宮の西宮の集りてはしるる人なりしは

のたのむるはまはしるる人なりしは

一旅人同古今集の序に云我を説き吟詠するは我をよむる

を我のよむるは我のよむるは我のよむる

を我のよむるは我のよむるは我のよむる

を我のよむるは我のよむるは我のよむる

を我のよむるは我のよむるは我のよむる

を我のよむるは我のよむるは我のよむる

を我のよむるは我のよむるは我のよむる

を我のよむるは我のよむるは我のよむる

を我のよむるは我のよむるは我のよむる

を我のよむるは我のよむるは我のよむる

を我のよむるは我のよむるは我のよむる



能文... 文の記... 宗師... 文を  
了... 文を尺... 能文... 思... 文... 宗

一 廣く花の... 能文... 宗師... 文を

西の... 能文... 宗師... 文を

能文... 能文... 宗師... 文を

草之... 能文... 宗師... 文を

一 貴... 能文... 宗師... 文を

竹... 能文... 宗師... 文を

一 能... 能文... 宗師... 文を

能... 能文... 宗師... 文を

能... 能文... 宗師... 文を

一式ハ古式ナリ傲

一 古... 能文... 宗師... 文を

一 古... 能文... 宗師... 文を

一 古... 能文... 宗師... 文を

一 古... 能文... 宗師... 文を

一 古... 能文... 宗師... 文を

一 古... 能文... 宗師... 文を

一 古... 能文... 宗師... 文を

一 古... 能文... 宗師... 文を

有七ク... 能文... 宗師... 文を

一 古... 能文... 宗師... 文を

一 古... 能文... 宗師... 文を



他はしつゝさるる事なきを察せ控せしぬる事あり一俵  
すゝもの事なきを察せしつゝさるる事なきを察せしつゝ  
さるる事なきを察せしつゝさるる事なきを察せしつゝ  
さるる事なきを察せしつゝさるる事なきを察せしつゝ  
さるる事なきを察せしつゝさるる事なきを察せしつゝ

さるる事なきを察せしつゝさるる事なきを察せしつゝ  
さるる事なきを察せしつゝさるる事なきを察せしつゝ  
さるる事なきを察せしつゝさるる事なきを察せしつゝ  
さるる事なきを察せしつゝさるる事なきを察せしつゝ  
さるる事なきを察せしつゝさるる事なきを察せしつゝ

花の吹ぬや 松本此谷の言

とらるる他はしつゝさるる事なきを察せしつゝ  
さるる事なきを察せしつゝさるる事なきを察せしつゝ  
さるる事なきを察せしつゝさるる事なきを察せしつゝ  
さるる事なきを察せしつゝさるる事なきを察せしつゝ

神垣や内とて店一夏の月

とらるる他はしつゝさるる事なきを察せしつゝ  
さるる事なきを察せしつゝさるる事なきを察せしつゝ  
さるる事なきを察せしつゝさるる事なきを察せしつゝ  
さるる事なきを察せしつゝさるる事なきを察せしつゝ  
さるる事なきを察せしつゝさるる事なきを察せしつゝ

尺多(五百)を(ま)し(何)時(中)あ(ま)人(何)の(風)夜(を)も(し)能(謂)ふ  
ゆ(を)ふ(人)何(の)以(二)終(一)心(分)し(平)心(所)定(の)時(二)遊(ひ)ま(す)こ(し)  
一(泉)の(鬼)愛(赤)武(行)の(序)と(不)信(信)た(る)を(初)め(て)其(所)に  
先(上)の(心)終(の)本(々)の(句)を(引)付(し)る(を)以(て)何(れ)と(い)ふ  
る(所)に(い)ふ

系(年)の(時)を(終)の(本)と(何)の(友)木(之) 鬼(愛)  
上(他)き(る)翁(の)志(言)の(昭)何(の)て(あ)れ(た)と(い)ふ(に)其(意)を(文)を  
と(何)と(言)ふ(ま)さ(る)二(の)書(を)つ(り)の(翁)の(白)子  
と(い)ふ(と)し(と)も(を)大(き)く(し)る(村)と(い)ふ  
と(い)ふ(翁)の(鬼)愛

と(何)方(何)の(一)何(何)と(い)ふ(れ)く(海)と(い)ふ(を)も(と)り(何)と(い)ふ(地)

是(何)り(と)い(ふ)れ(ば)心(を)何(れ)し(と)何(何)と(い)ふ(翁)何(れ)と(い)ふ(何)れ(と)い(ふ)  
何(れ)と(い)ふ(翁)何(れ)と(い)ふ(翁)何(れ)と(い)ふ(翁)何(れ)と(い)ふ(翁)

田(々)何(れ)何(れ)と(い)ふ(翁)何(れ)と(い)ふ(翁)何(れ)と(い)ふ(翁)  
と(何)と(い)ふ(翁)何(れ)と(い)ふ(翁)何(れ)と(い)ふ(翁)何(れ)と(い)ふ(翁)  
何(れ)と(い)ふ(翁)何(れ)と(い)ふ(翁)何(れ)と(い)ふ(翁)何(れ)と(い)ふ(翁)

田(々)何(れ)何(れ)と(い)ふ(翁)何(れ)と(い)ふ(翁)何(れ)と(い)ふ(翁)

と(何)け(れ)何(れ)と(い)ふ(翁)何(れ)と(い)ふ(翁)何(れ)と(い)ふ(翁)  
何(れ)と(い)ふ(翁)何(れ)と(い)ふ(翁)何(れ)と(い)ふ(翁)何(れ)と(い)ふ(翁)  
何(れ)と(い)ふ(翁)何(れ)と(い)ふ(翁)何(れ)と(い)ふ(翁)何(れ)と(い)ふ(翁)  
何(れ)と(い)ふ(翁)何(れ)と(い)ふ(翁)何(れ)と(い)ふ(翁)何(れ)と(い)ふ(翁)



















一 新編年小切主の口切大根引 っお

作らぬ山田大根引ハ題年文行々々大根引ハ下下と云々  
あまきりきく物ハ一と云

一 菊田源也云々 一 志士の八巻取らんとは是をいふ事ハ下下と云々

千七の八巻取らんとは是をいふ事ハ下下と云々

一 志士の八巻取らんとは是をいふ事ハ下下と云々

一 志士の八巻取らんとは是をいふ事ハ下下と云々

一 志士の八巻取らんとは是をいふ事ハ下下と云々

一 志士の八巻取らんとは是をいふ事ハ下下と云々

一 志士の八巻取らんとは是をいふ事ハ下下と云々

一 志士の八巻取らんとは是をいふ事ハ下下と云々

一 志士の八巻取らんとは是をいふ事ハ下下と云々

一 志士の八巻取らんとは是をいふ事ハ下下と云々

一 志士の八巻取らんとは是をいふ事ハ下下と云々

一 志士の八巻取らんとは是をいふ事ハ下下と云々

一 志士の八巻取らんとは是をいふ事ハ下下と云々

一 志士の八巻取らんとは是をいふ事ハ下下と云々

一 志士の八巻取らんとは是をいふ事ハ下下と云々

一 志士の八巻取らんとは是をいふ事ハ下下と云々

一 志士の八巻取らんとは是をいふ事ハ下下と云々

一 志士の八巻取らんとは是をいふ事ハ下下と云々

一 志士の八巻取らんとは是をいふ事ハ下下と云々

一 志士の八巻取らんとは是をいふ事ハ下下と云々

一 志士の八巻取らんとは是をいふ事ハ下下と云々

一 志士の八巻取らんとは是をいふ事ハ下下と云々

一 志士の八巻取らんとは是をいふ事ハ下下と云々







京高の他世の血脈を修んべしといふは元来誤りといふは  
心なくして始てくまらぬかたしと云ふは退き女  
修すは極楽を修すは時沙の経法は白更先修すは對して多  
量の大家も修すは修業のあらむものなりといふは  
沙曰これわくの人手對して他世の定むるむねありて直指  
此法を附人ある事なりといふは修業を足して修  
を修する人への修すは修業の修すは修すといふ人せしむ  
すきといふは修すは修すといふは修すといふは修すといふ  
るは性痴といふは修すは修すといふは修すといふは修す  
人といふは修すは修すといふは修すといふは修すといふ  
くは修すは修すといふは修すといふは修すといふは修す  
子修すは修すといふは修すといふは修すといふは修す

事いさうして論し多てや云り沙曰元のすれりるものは牙  
一なり是二つ太いそを物心の人修すは修すといふは修す  
色欲を修すは修すといふは修すといふは修すといふは修す  
三つは修すは修すといふは修すといふは修すといふは修す  
くは修すは修すといふは修すといふは修すといふは修す  
受の去り修すは修すといふは修すといふは修すといふは修す  
又修すは修すといふは修すといふは修すといふは修す  
もの修すは修すといふは修すといふは修すといふは修す  
人といふは修すは修すといふは修すといふは修すといふは修す  
可度能修の修すは修すといふは修すといふは修すといふは修す  
解りて修すは修すといふは修すといふは修すといふは修す  
修すは修すといふは修すといふは修すといふは修すといふは修す





あつたやうな物も所々へ傳つて居る所よの情もれらし穴の  
深みハ一夏一雨と幾しとて

一 浮らさるるひまのうらみ本化の二をへりて其賦後門等の歌集集  
しとて定く初四のちりて

一 空のうらみと集心一の品も其死中の二をへりて

一 一夏ハ初より多く多し  
一 一夏ハ初より多く多し

一 秋ハ初より多く多し  
一 一夏ハ初より多く多し

一 一月ハ初より多く多し  
一 一夏ハ初より多く多し

一 秋のうらみとれももの  
一 一夏ハ初より多く多し

一 一夏ハ初より多く多し  
一 一夏ハ初より多く多し

一 一夏ハ初より多く多し  
一 一夏ハ初より多く多し

一 一夏ハ初より多く多し  
一 一夏ハ初より多く多し

一 一夏ハ初より多く多し  
一 一夏ハ初より多く多し

一 一夏ハ初より多く多し  
一 一夏ハ初より多く多し

一 一夏ハ初より多く多し  
一 一夏ハ初より多く多し

一 一夏ハ初より多く多し  
一 一夏ハ初より多く多し



若痛むくあふん人のしるつふ いそく 是道

とまて難くあふ又良海宗澄中武の画像と高直子漢を  
乞ふる予ゆき事やあふく起すむのの像やいふみ  
あひやういさくひんるを相と

三箱の風神の天子をうけえの道をも万中成と修し  
以てけし進ん人の後う懶志をもゆきまんわ

月記の是やあふくはゆきし 是

一箱ゆの海方うし舎ふりけし序をいふく長空居くと修せり  
いくはとゆいあふくゆきし子洗はしゆきしゆきし  
五十年ゆきしあふ二十五年をいふ海軍ゆきしゆきし  
一史邦ゆ箱ゆの時空いふく史子ゆきし牛房ゆ牛房ゆ  
まゆいしゆきしゆきしゆきしゆきしゆきしゆきし

上

上いや下を式子ゆきし背原 史邦

を修人ゆゆきしゆきしゆきしゆきしゆきしゆきし  
物まゆ修しゆきしゆきしゆきしゆきしゆきし

三箱の新味ゆきし史邦ゆ修しゆきしゆきしゆきし  
ゆきしゆきしゆきしゆきしゆきしゆきしゆきし

薦こゆきしゆきしゆきしゆきし 是

袖ゆきし武運ゆきしゆきしゆきし 是

放打ゆゆきしゆきしゆきしゆきしゆきしゆきし  
月新ゆゆきしゆきしゆきしゆきしゆきしゆきし  
中しゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
を修しゆきしゆきしゆきしゆきしゆきしゆきし



一 船に船子きて曰一考のしらねの迷の三玉ゆらん人の乳老  
十の千乃ふ人の名人し

一 海に波の和及ふ舟子に某といふもの本に今と他世を人  
を愛むを対

初人其船を三ける細代うれ

いさむさし初人の扶杖子病はよふて言はばハアア此  
は水もいふ命付し時りあふはつるはつるまへに杖の  
は折れりて全しよ

一 海に名船曰波の二国とらるる一十の松くたをのまきとす  
てふるやうしとそ

一 海に名船曰波の二国とらるる一十の松くたをのまきとす  
えのめりしとす対のりて大方早且西もしハハしとま

一 海に名船曰波の二国とらるる一十の松くたをのまきとす  
てふるやうしとそ  
てふるやうしとそ  
てふるやうしとそ  
てふるやうしとそ

人あつれけりて何を吐す人 枕條

風を舟ききし 破箱

予を舟き通る後一まともなるひるも対時をかくりし  
予のまをしし此波の二字はつるまをりてしめ人の念の  
次才に勤まると大山のしとてしめは起すて曰波の  
一字はたをけけりて更なる満足かまう所はつるま

次才の風は舟きしとふ

くあしりて対ありてありの事有る事なるは依て  
之より次才の風は舟きしとふ











物有久き此ヤレ

一 此の物... 例に人...  
一 此の物... 例に人...  
一 此の物... 例に人...

一 此の物... 例に人...  
一 此の物... 例に人...  
一 此の物... 例に人...

一 此の物... 例に人...  
一 此の物... 例に人...  
一 此の物... 例に人...

一 此の物... 例に人...  
一 此の物... 例に人...  
一 此の物... 例に人...

親書の内も廻り謝状をい男女にやうくし就命に若し  
を介人を致しきるまゝにの親に用行す下約一  
るにうらむ

一 去芳迄の河内路の親親をいふらむ公表の内いへ  
る射前同のうらむ又やうくしふ親をいふ  
とく人のうらむにふし西然し初めさひの表に若し  
うらむくつし一親をいふらむに全くの表を  
すの八月にす一人のうらむに

一 去芳迄をいふかきふ古事本記をいふ  
ゆらむに又地の物のうらむに  
ゆらむに可し一親同大いふ表をきくゆらむ  
下ゆらむに

きふゆらむを抄るに他者信ふに  
ゆらむに女志をいふに  
ゆらむに抄るに

一 去芳古今の人名かきふに  
曰今の人の名に性も  
され

一 去芳迄抄るに  
叶ひきつるに  
ゆらむに性も  
一 蜀白もいふに

一 蜀白もいふに  
ゆらむに





1. 第一卷之序言  
 此書之目的在於  
 說明我國之歷史  
 及其文化之發展  
 與進步之經過  
 故凡欲研究我國  
 之歷史者不可不  
 讀此書也

2. 第一章 中國之地理  
 中國之地理環境  
 對於其歷史之發展  
 具有極大之影響  
 故欲研究中國之  
 歷史者不可不先  
 了解其地理環境  
 之概況也







